

早稲田大学北方言語・文化研究会「民族接触 -北の視点から-」(1989年7月 六興出版刊) 抜刷

モンゴル語族と近隣の諸言語との言語接触
——中国青海省、甘粛省の「孤立的」モンゴル系諸言語を中心に——

栗林 均

六興出版

モンゴル語族と近隣の諸言語との言語接触

——中国青海省、甘粛省の「孤立的」モンゴル系諸言語を中心に——

栗林 均

1

モンゴル語族は中央アジアのモンゴル高原を中心に分布するモンゴル系の諸言語、諸方言のグループである。この語族に属する主な言語としては、モンゴル人民共和国のハルハ・モンゴル語（話し手数約180万人）、ソ連邦内のブリヤート自治共和国のブリヤート語（約30万人）やカルムイク自治共和国のカルムイク語（約12万人）、中国内の内蒙古自治区を中心に行なわれている内モンゴル語（約300万人）等があり、話し手の総数は500万人から600万人と推定される。

モンゴル語は13世紀以来の書記記録を有するが、それが記録された当初から今日に至るまでのいずれの時代にも、またいずれの言語・方言をとってみても、そこにはチュルク系諸言語、チベット語、中国語、満州・ツングース系諸言語、ロシア語等々、様々な言語から受けた影響が認められる。これは、言うまでもなく、それらの言語の担い手であるモンゴル系民族と近隣の諸民族との歴史的な接触と交流が言語に反映されて今日に伝わっているものである。

本稿では、中国の青海省および甘粛省に行なわれているモンゴル系の諸言語、具体的には、

- 1) モンゴオル（土族）語
- 2) バオアン（保安）語
- 3) ドウンシャン（東郷）語
- 4) シラ・ユグル（東部裕固）語

の4言語を取り上げて、それらと近隣の諸言語との言語接触の問題を検討してみたい。これらは、いずれも従来比較的良好に知られているモンゴル系の諸言語、たとえば、上述のハルハ・モンゴル語、ブリヤート語、カルムイク語、内モンゴル語等とは著しく外貌が異なり、独自の主要な言語的特徴を有することから、

表4 モンゴル系諸言語・諸方言の分類（それぞれの言語を構成する具体的な言語名・方言名は省略）

I	西方派	a) カルムイク群 b) オイラト群
II	東方派	a) 南部(内モンゴル)群 b) 中部(ハルハ)群 c) 北部(ブリヤート)群
III	孤立的諸言語	1) モゴール語 2) モンゴオル(土族)語 3) バオアン(保安)語 4) ドウンシャン(東郷)語 5) シラ・ユグル(東部裕固)語 6) ダグル(達斡爾)語

Weiers, 1986による¹¹⁾

モンゴル語族中の他のいずれの言語・語派からも独立した「孤立的」言語として位置づけられている。

ちなみに、これらの他に、モンゴル語族中の「孤立的」言語として分類されているのは、アフガニスタンのモゴール語と中国東北地方に行なわれるダグル(達斡爾)語である(表4を参照)。

一般に、「孤立的」諸言語に特有の言語的特徴には保守的なものと改新的なものとの2つを認めることができる。

前者は他のモンゴル系の諸言語では失われた古風な特徴が保持されているものであり、後者はこれらの言語で独自に生じた言語変化や改新である。

孤立的言語に見られる古風な言語的特徴は、モンゴル語の歴史・比較研究に貴重な資料を提供する。たとえば、古い文献に見られて現代語の大部分では失われた語形や意味が、しばしば孤立的言語に残存形式として実証されることがある。また、よく知られているように、13～14世紀のいわゆる「中世蒙古語」に見いだされ、現代の多くのモンゴル系諸言語で失われた語頭の無声摩擦喉音hに対応して、孤立的諸言語(モゴール語を除く)ではなんらかの無声摩擦子音が保持されている。

他方、それらが保持している古風な特徴にもまして孤立的諸言語の外貌を際立たせているのは、それらが被った大々的な言語変化や改新である。そこでは、他の言語と接触することによって、それらの影響のもとに生じた言語変化が特に顕著に認められる。一般に、外的な要因による言語変化としては、他言語からの借用語の増加やそれに伴う2～3の周辺的な音素の発生といった現象が指摘されることが多いが、これらの言語ではそれが音韻体系、音節構造、文法形態、さらには語順といった言語の主要分野の基本的な構造にまで及んでおり、言語接触によるモンゴル語変容の興味深い事例を観察することができる。

ところで、中国青海省、甘粛省の「孤立的」モンゴル系諸言語の研究の歴史は新しい。それらの中で、例外的に、モンゴオル(土族)語だけは、すでに1920年代末から40年代にかけて音声、文法、辞書等の信頼できる記述資料が公刊されているが¹²⁾、他の3言語(バオアン語、ドウンシャン語、シラ・ユグル語)に関しては、1955～56年に行なわれた中国国内のモンゴル系諸言語・諸方言の言語調査によって初めて音韻と文法の概略が明らかになり、その結果モン

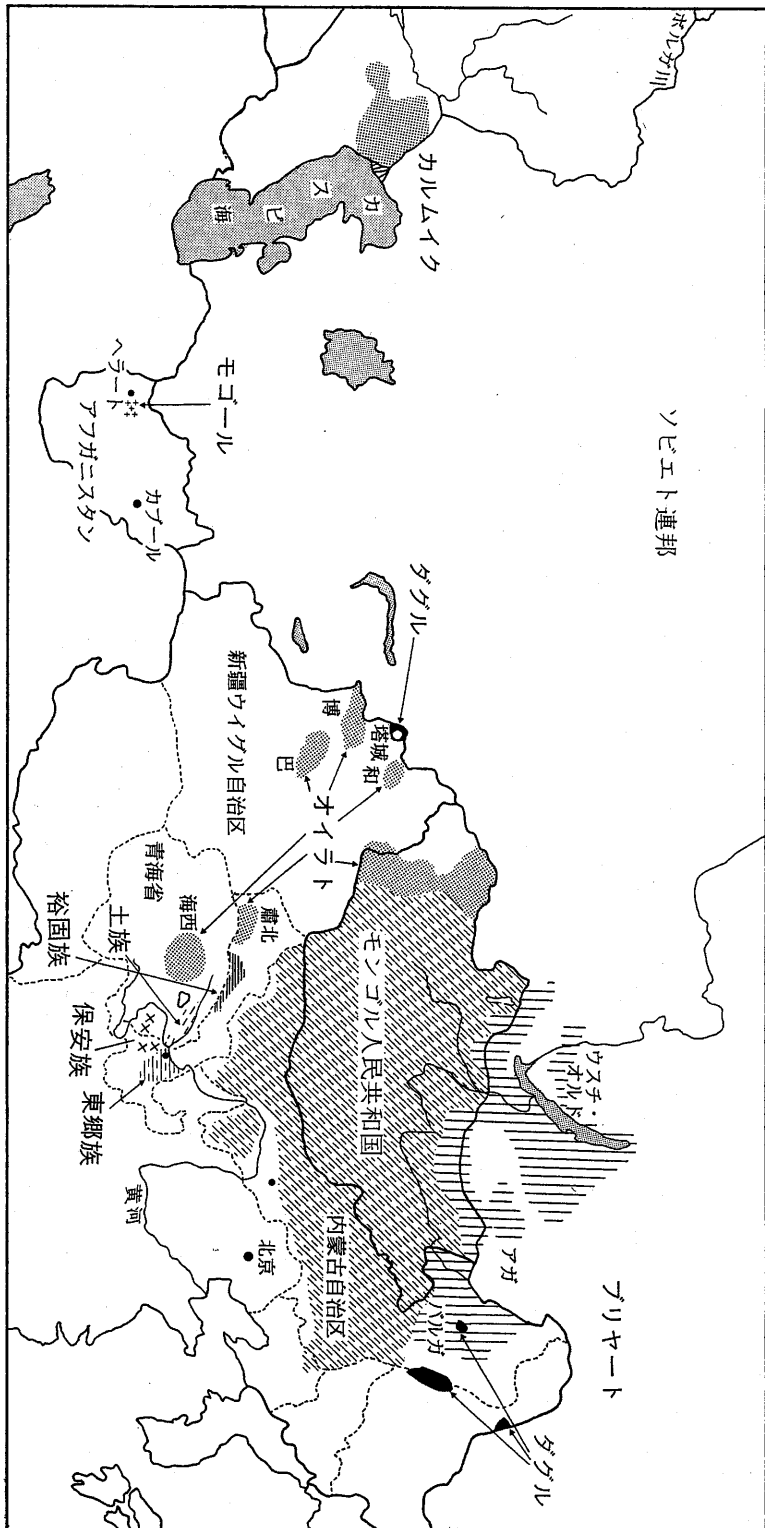
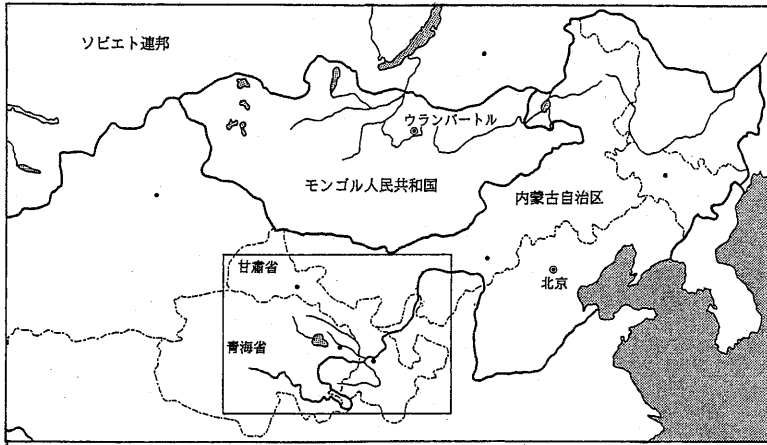


図31 モンゴル系諸言語(諸民族)主要分布図



ゴル語族中における独立の言語と認められた。当時の言語調査の成果もいくつかの論文や著書として公刊されているが⁽³⁾、言語の概略を知るといふ以上に、本格的な記述研究、比較研究の資料とするには量的・質的に十分というわけにはいかなかった。1980年代に入って中国で公刊された「中国少数民族語言簡誌叢書」に収められているこれらの言語の概説は、同じ調査に基づきつつ追調査の結果を加えたもので、この欠陥をある程度補うものである⁽⁴⁾。これに加えて、

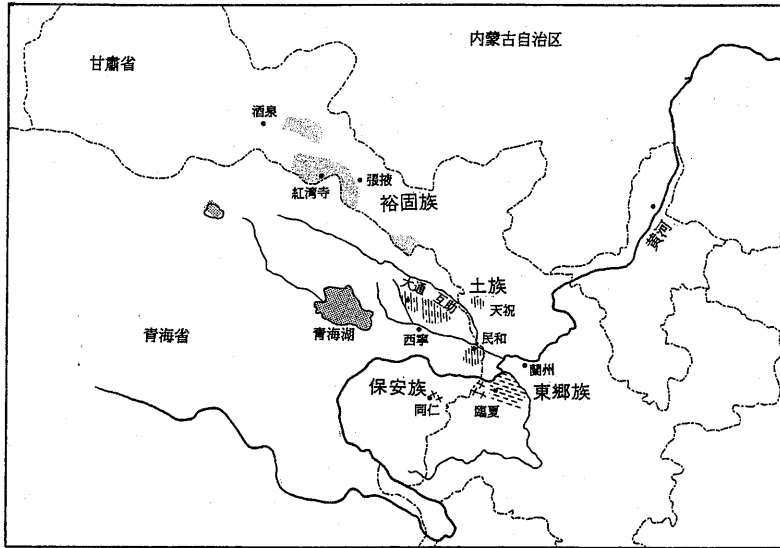


図32 裕固・土・保安・東郷各族の分布図

1980年には内蒙古大学

の蒙古語文研究所のスタッフによってこれらの言語を含む中国国内のモンゴル系諸言語・諸方言の組織的な言語調査が行なわれ、その研究資料が「蒙古語族語言方言研究叢書」(全21巻)⁽⁵⁾として1982年から刊行が開始され、ここに研究の新たな段階を迎えている。

2

中国青海省、甘肅省に行なわれているモンゴル系の「孤立的」4言語の分布と状況、話し手等の概略は、次の通りである⁽⁶⁾(図32を参照)。

1) モンゴル(土族)語

中国青海省の互助土族自治県および民和県を中心に居住する土（トゥー）族によって話される。土族の人口は15万9632人（1982年）であるが、このうち青海省大通県の土族はすでに漢語しか話さず、また青海省同仁県の自称「土族」（約3500人）が話しているのはモンゴル語でなく、バオアン（保安）語である。

固有の文字をもたず、書記には漢語やチベット語を用いてきたが、1979年から互助土族自治県で中国語の併音方式によるローマ字アルファベット（26文字）を使った文章語の普及が試みられている。伝統的に仏教（ラマ教）を信じ、文化的にチベットと関係が深い。

主要な方言としては、互助土族自治県の「互助方言」と、民和県の「民和方言」に分けられる。

2) バオアン（保安）語

中国甘粛省、臨夏回族自治州の積石山保安族東郷族撒拉族自治県の保安族、および上述の青海省同仁県の「土族」によって話される。保安族の人口は9017人（1982年）。独自の文字をもたない。保安族はイスラム教徒である。伝承によれば、保安族は元来、青海省同仁県（保安營）に居住していたイスラム教徒であるが、清朝同治年間の初（1860年代）にラマ教領主の圧政を逃れて現在の地（積石山）に移住してきたという。

なお、上述の青海省同仁県の「土族」は仏教（ラマ教）を信じる。

甘粛省積石山の保安族の話す保安語を「大河家方言」、青海省同仁県の「土族」の保安語を「同仁方言」と呼ぶ。前者には中国語の影響が大きく、後者にはチベット語の影響が著しい。

3) ドゥンジャン（東郷）語

中国甘粛省、臨夏回族自治州の東郷族自治県に主として分布する東郷族によって話される。別名サンタ語。独自の文字をもたず、書記には漢語を用いる。東郷族の人口は27万9523人（1982年）と、多い。イスラム教徒で風俗や習慣は回族のそれとほとんど同じである。内部の方言的差異は小さい。

4) シラ・ユグル（東部裕固）語

中国甘粛省の肅南裕固族自治県の東部（康楽区、皇城区）に居住する裕固族によって話される。独自の文字をもたない。仏教（ラマ教）を信じる。

裕固族の人口は1万568人（1982年）であるが、これは次のように異なった系統の言語を話す3つのグループから成る。

- (1) 東部裕固語、別名シラ・ユグル語あるいはアングル（恩格爾）語
- (2) 西部裕固語、別名サリク・ユグル語あるいはヤオフル（堯乎爾）語

(3) 中国語（漢語）のみ

東部裕固語はモンゴル語系であるが、西部裕固語はチュルク語系で、両者は系統が異なり互いに通じない。裕固族内の3つの言語の話し手の比率はそれぞれ3分の1前後である。

なお、上述の4民族（土族、保安族、東郷族、裕固族）のいずれにおいても、すでに民族語を話さず中国語（漢語）だけを話す者が少なからず存在しており、住民のほとんどが中国語やチベット語との二重言語生活を送っている。

ここで、これらの言語的なまとまりと民族的なまとまりとが必ずしも一致していないことに改めて注意を喚起しておきたい。たとえば、「土族」のうちには、土族の大部分が話すモンゴル（土族）語と互いに全く通じないバオアン（保安）語を話すグループが含まれている（青海省同仁県の「土族」）。さらに裕固族に至ってはモンゴル系とチュルク系という系統の異なる言語の話し手が一つの民族としてのアイデンティティを保持している。

これは、これらの集団において、民族的なアイデンティティを自覚する判断の基準として自分達が用いている言語よりはむしろ宗教や風俗等の、言語以外の要素により大きな比重が置かれていることを示している。

3

モンゴル語、バオアン語、ダウンシャン語、シラ・ユグル語の4言語はそれぞれ独立した言語として独自の言語的特徴を有しているが、同時に他のモンゴル系諸言語と対比して、4言語に共通の特徴も存在する。たとえば音声面では、次のような目立った特徴が上記4言語のすべて、あるいはいくつかに共通である。

- (1) 語の強勢が語末の音節の母音におかれる（4言語に共通）。
- (2) 語頭の音節の母音が弱化して、それらの内のあるものは歴史的に消失した。これによって、語頭に子音連続や子音 r が現われる（4言語に共通）。
- (3) 母音調和が完全に破壊され、あるいは僅かに語幹内に痕跡としてみとめられるにすぎない（東部裕固語を除く3言語に共通）。
- (4) 後舌の円唇母音に対立する前舌の円唇母音をもたず、母音体系が単純化している（東部裕固語を除く3言語に共通）。
- (5) 短母音と長母音の対立がない（東郷語、モンゴル語民和方言、保安語大河家方言に共通）。

上掲の特徴のうち「母音調和の存在」、「語頭に子音連続が立たない」、「語頭に子音rが立たない」といった特徴は、しばしば「アルタイ諸言語」あるいは「ウラル・アルタイ諸言語」に共通の特徴として指摘されるものであるが、これらの言語ではそうした基本的な特徴さえもが変容を被っており、変化の深刻さが窺われる。音声面でのこうした変化のために、これらの言語に継承されているモンゴル語固有の単語にしても他のモンゴル系諸言語のものとは著しく音形が異なるに至り、これらの言語の外見を独特なものにしている。

こうした音声面での大幅な改新変化に関連して、これらと近隣の諸言語との言語接触が果たした役割について検討してみたい。

3-1

最初に取り上げたいのは、上記4言語で単語の強勢が語末の音節の母音に置かれている現象である。モゴール語を除く他のすべてのモンゴル系諸言語では語の第1音節の母音に規則的な強勢があることから、語末の強勢はモンゴル祖語の状態を反映したものでなく、これらの言語で歴史的に獲得された結果であると考えられる。同時に、チュルク系の諸言語では、これらの言語と同様に語末音節の母音に規則的に強勢が置かれていることから、これらの言語における「語末音節への強勢の移動」がチュルク系言語の影響によるものであることは容易に推定することができる。

それでは、これらの言語とチュルク系諸言語との言語接触はどのような種類のものであったのだろうか？

第1に指摘できることは、「語末音節への強勢の移動」が、これらの言語でかなり古い時代に帰せられるべき変化だということである。さきに列挙した主要な音声的特徴のうち、「語頭音節の母音の弱化・消失」や「語頭の子音連続の存在」等の現象は強勢が語末の音節に置かれたことが原因となって生じた変化であり、「強勢の移動」はそうした他の変化に先立つ変化として位置づけられる。さらに、「強勢が語末音節の母音にある」という特徴が上記4言語のすべてに共通しているということは、この変化（「語頭音節から語末音節への強勢の移動」）が上記4言語が分裂する以前に起こった可能性がある。

第2に、この変化は言語構造の中できわめて根幹的な性質にかかわるものであることを見逃すわけにはいかない。それぞれの言語に固有の強勢やアクセントのような特徴は、他の言語習慣と比較して、その習慣を改めることが最も困難なものに数えられる。外国語の学習に際しても、母語のアクセント習慣を完全に脱することはきわめて困難であり、外国語をよほど流暢に話すことを習得

した場合にも、そこに学習者の母語のアクセントが（文字通り訛りとして）認められることは実際に我々のよく経験するところである。こうした事実を考慮に入れるなら、「強勢の移動」の変化は、借用語の受け容れ等、表面的な言語接触に対して、むしろ、より根源的な要因によって説明されるべきであろう。

こうして筆者は、これらの言語における語末位置の強勢は、チュルク系言語の「基層 (substratum)」によって説明するのが最も妥当であると考え。ここでいう「基層」とは、ある集団が自分たちの言語を捨てて、別の言語を採用した際に、新たに採用された言語に反映されていると考えられる元の言語の特徴である。つまり、これら4言語は、元来チュルク系の言語を話していた住民にモンゴル語が受け容れられた形態であり、ここではチュルク系の言語からモンゴル系の言語へと言語の取り替えが行なわれた、と考えられる。

シラ・ユグル（東部裕固）語の場合、民族名のユグル（裕固）はウイグル（維吾爾）と同源であり、その話し手が元来チュルク系の民族であったという上の推定を支持するものである。

3-2

次に、これらにおける音節構造の大幅な変化について検討しよう。

語頭に子音連続が頻繁に現われるのはモンゴール（土族）語、バオアン（保安）語、およびシラ・ユグル（東部裕固）語の3言語である。語頭にたつ2つの子音の組み合わせはそれぞれの言語毎に多少異なるが、主要なタイプは次のようにまとめることができる：

- 1) 鼻 音 + 破裂・破擦音 (mb, nd, ndz, ng 等)
- 2) 無声摩擦音 + " (sd, sg, hdz, hg 等)
- 3) r + " (rb, rd, rdz, rg 等)

(b, d, g, dz 等は無声無気音の系列)

これらの言語で、このような子音連続が語頭に形成されるのに大きな役割を果たしたと考えられるのは、同地方（アムド地方）に行なわれるチベット語方言の影響である。モンゴール語、バオアン（保安）語同仁方言、シラ・ユグル語の話し手はいずれも仏教（ラマ教）徒であり、チベット語は文化語、宗教語としての役割を果たしてきた。上掲の子音連続の多くは、同地方のチベット語方言の語頭にも現われ⁽⁷⁾、これらの言語においては、語頭に子音連続をもつチベット語からの借用語が少なくない。その際、チベット語の子音連続が全てそのままの形で、これらの言語に受け入れられているわけではなく、語頭の子音連続の受容の範囲はそれぞれの言語毎に異なり、それに応じて子音連続のある

ものは変容を被って借用されている⁽⁸⁾。

	保安語	チベット語	
1)	mbaxge	nbakke	「塑像」
	ndec	ndok	「顔色」
	ŋce	ŋgo	「頭」
2)	sda	sta	「馬」
	sgaŋ	hkaŋ	「骨髓」
	ħdzac	htcak	「鉄」
3)	rdac	frətak	「獣」
	rge	figo	「ノロジカ」
	rŋa	hŋa	「鼓」

さらに、語頭における子音連続は借用語に限らず、固有の語彙にも観察される。固有語における語頭の子音連続は、これらの言語で強勢が語末音節の母音に移ったことと関連して、語頭音節の強勢のない母音が弱化し、消失したことによって生じたものが多い。

	保安語	蒙古文語	
1)	mba:-	umba-	「泳ぐ」
2)	sda-	čida-	「できる」
	sgc	süke	「斧」
	ħdza-	quča-	「吠える」
	土族語	蒙古文語	
1)	nde:-	ende	「ここに」
	ŋgo	öngge	「色」
2)	sgode-	sögüd-	「ひざまずく」
	xgai	ɣaqai	「猪, 豚」
3)	rdem	erdem	「学問」
	rgon	örgeŋ	「広い」
	rdzi:-	irɣayi-	「歯をむく」

同時に、子音で始まる語の語頭にさらに子音が添加されたり、語頭の母音が消失した位置に新たに子音が添加される場合（prosthesis 語頭音添加）も若干観察される。

保安語	蒙古文語	
nde-	ide-	「食べる」
ndzəŋ	ɣarun	「百」
土族語	蒙古文語	
mbar	bar	「印版」
ŋcua-	ugiya-	「洗う」

このような固有語における語頭音節の母音の消失や語頭音添加は、チベット語からの借用語等を通して徐々にこれらの言語に浸透していた一定のタイプの子音連続に合致する方向で形成が進んだものと考えられる。

次に、ドゥンジャン（東郷）語の音節構造に目を移すと、そこでは上に見たような語頭の子音連続は稀であるが、別の点で上述の3言語に劣らず重大な変化が観察される。ドゥンジャン（東郷）語では、他のモンゴル諸語と比較して音節のタイプが非常に単純化している。音節の種類としては、一般に母音で終わる開音節と子音で終わる閉音節を区別することができるが、東郷語の閉音節は、子音nないしŋで終わるものがその全てである。これに対して蒙古文語形、その他のモンゴル系諸言語においては子音b, d, g, γ, m, n, ŋ, s, r, l等に終る閉音節は、ありふれた音節構造の形式である。ドゥンジャン（東郷）語ではnとŋ以外のかつての音節末子音（蒙古文語のb, d, g, r, m, s, r, lに対応する子音）は全て、

- 1) 消失したり、
- 2) nやŋに変化したり、
- 3) 直後に母音を従えたり

して、音節末の位置から脱する変化が生じたのであり、これがためにこの言語の外貌は他のモンゴル系諸言語のそれと著しく異なるに至った⁽⁹⁾。

東郷語	蒙古文語	
1) dzo	ɣöb	「正しい」
bula	bular	「泉」
udu	edür	「日」
2) curuŋ	qurim	「宴会」
qaŋ	ɣal	「火」
banɣan	bergen	「嫂」

3) tsudu-	čad-	「飽きる」
ogi-	ög-	「与える」
bolu-	bol-	「成る」
kuru-	kür-	「達する」

この変化に対しては、中国語（漢語）の影響が大きく作用している。周知のように、中国語の音節構造としては、閉音節では (C)Vn と (C)Vŋ がその主要なタイプであり、東郷語の音節構造はこれと完全に合致している。

東郷語では、基本数詞の 1～9, 10, 20までを固有語で表現し、30以上は漢語からの借用語を用いている程、語彙に占める漢語からの借用語の割合は大きい。陳乃雄（1988）によれば、この言語の基本的な調査語彙（3171語）のうち中国語の占める割合は約50%に達している⁽¹⁰⁾。中国語から受ける言語的干渉の度合もそれだけ大きく、その影響がこうした音節構造の改変を引き起こしたものと考えられる。

4

音声面での大々的な改新変化に加えて、これらの言語における文法・形態面での特徴に目を転じてみよう。

まず、注意を引くのは、モンゴール（土族）語、バオアン（保安）語、ドンシャン（東郷）語、およびシラ・ユグル語のいずれにおいても、形態が著しく単純化していることである。シラ・ユグル語以外の3言語では、すでに語尾にまで及ぶ母音調和がなく、語幹の母音の違いによって語尾の母音が交替する異形態が存在しないこともその現われの一つである。例えば、ハルハ・モンゴル語では奪格語尾は語幹の母音にしたがって接尾辞の母音も -ās/-ēs/-ōs/-ös と4種類に変化する。シラ・ユグル語では奪格語尾は -sa/-se/-so の3種類であるが、他の言語では -sa（土族語）、-sə（保安語、東郷語）という1種類の語尾しかない。

しかも、文法・形態の単純化は、母音調和の欠如に起因する場合にとどまらず、これら4言語では他のモンゴル系諸言語と比較して、一般に文法形態における異形態の種類が少ない。ハルハ・モンゴル語の属格接尾辞は、語幹末の音の種類によって

- ī (子音 ŋ に終わる語幹につく)
- īŋ (ŋ 以外の子音に終わる語幹につく)
- giŋ (ī 以外の長母音に終わる語幹につく)
- ŋ (長母音 ī, 二重母音に終わる語につく)

という4つの異形態がある。これに対して、土族語と保安語では属格・対格語尾として -nə が、同様に東郷語では -ni があるだけで、これが全ての語幹に接尾する。

表5は、これら4言語における格語尾の体系であるが、土族語、保安語、東郷語では、一つの格に対してただ1種類の語尾が対応しており、文法形態の単純さがみてとれる。

さらに、名詞の格変化において、対格形と属格形が融合 (syncretism) して同形となっているように、一般に名詞の曲用や動詞の活用の種類自体も、他のモンゴル系諸言語と比較して少ない。

これらの言語で文法形態が単純化しているのは、歴史的にこれらの言語の話し手の数が減少の一途をたどり、共同体内におけるそれら言語の役割も徐々に狭められてきたことがその一因と考えられる。言語の使用者と使用される状況が拡大していく場合には、言語自体もその要求に見合うために様々な要素を吸収しつつ語彙や表現形態を豊富化し、複雑化していくが、逆に言語の使用される社会的な状況が限定されていく場合には言語自体もそれに応じて縮小し、単純化していく現象が多くの場合に観察される。

また、それと同時に、言語間の接触に際して、より大きく干渉を受ける側の言語は、文法形態が単純化していく——言ってみれば「擦り切れ」ていく——という一般的な傾向があるように思われる。

5

最後に、これらの言語の統語論上の一特徴について触れておきたい。

ドゥンシャン語を除くモンゴル語、バオアン語およびシラ・ユグル語の3言語ではいずれも、陳述に2種類の様式がある。一つは、話者が叙述内容を自己の経験内の確かな知識として述べる表現形式であり、もう一つは叙述内容を話者の経験外の事実として客観的に述べる表現形式である。こうした陳述は、それぞれ次のような2種類の助動詞によって表わされる。

表5 格語尾の体系

	土族語	保安語	東郷語	東部裕固語
主格	-∅	-∅	-∅	-∅
属・対格	-ne	-ne	-ni	-ə/-in/-n
与位格	-də	-də	-də	-də
奪格	-sa	-sə	-sə	-sa/-se/-so
造格	-la	-gale	-cala	-ār/-ēr/-ōr
連帯格			-la	-la/-le/-lo
共同格	-dī			-di
方向格			-yur	
場所格			-re	

(-∅ はゼロ接尾辞を表わす)

話者の経験内・熟知 話者の経験外・客観的

土族語	i	a ~ va
保安語	i	o
東部裕固語	be	bai

チンゲルタイ（清格爾泰，1982）は、モンゴオル（土族）語におけるこれら2つの陳述様式が「主観的」陳述と、「客観的」陳述の違いを表わしていることを論証し、さらに現代の蒙古文語に若干の活用形としてのみ残存している a-, bü-(bö-) という2つの助動詞の意味の違いにもこれに合致した面があることを指摘している⁽¹¹⁾。

これに関連して、筆者はこの現象のもう一つの側面に注意を喚起したい。それは、陳述様式における類似の特徴が、近隣のチベット語や、チュルク系のサラル（撒拉）語やサリク・ユグル（西部裕固）語、さらに新疆ウイグル自治区に行なわれている満州・ツングース系のシボ（錫伯）語においても観察されることである。

たとえば、チベット語の判断と存在を表わす動詞では、陳述様式にそれぞれ次のように2種類の区別がある⁽¹²⁾。

話者の経験内・熟知 話者の経験外・新しい内容

判断(～である)	jī?	re?
存在(～がある)	jø?	tu?

チュルク語系のサラル（撒拉）語では、現在時制をのぞく次の4つの時制に、同様の陳述様式の区別がある⁽¹³⁾。

	話者の経験・主観	話者の経験外・客観的表現
過去	-dʒi	-miʃ
未来	-cur	-ga(r)
進行	-bər	-ba(r)
完了	-can/-gen + var	-can/-gen + vara

また、満州・ツングース系のシボ（錫伯）語には、過去、現在進行、過去進行、不完了過去、過去完了の時制形において、次のような接尾辞によって2種類の陳述様式を区別している⁽¹⁴⁾。

	話者の経験・目撃・熟知	話者の経験外・客観的表現
過去	-xə, -xəŋ	-xəi
現在進行	-maxə, -maxəŋ	-maxəi
過去進行	-max bixə	-max bixəi
不完了過去	-m bixə	-m bixəi
完了過去	-x bixə	-x bixəi

これらの言語におけるこうした陳述様式のカテゴリーの類似を、単なる偶然として見過ごすわけにはいかないであろう。チベット語を暫く措くとすれば、これがアルタイ諸言語の系統的な親縁関係と関連して、アルタイ祖語の特徴を継承している残存形態である可能性も否定できない。しかし、それと同時に、それらの類似が言語接触の中で生じた可能性も十分考慮に入れる必要がある。つまり、そうした類似は言語の系統的な親縁関係とは無関係に、隣接諸言語間に共有されている類似的な特徴（類縁性 *affinity*）として、そこに「言語連合（*Sprachbund*）」とみなし得るような関係が認められる可能性があることを、ここに指摘しておきたい。

注

- (1) M. Weiers, 1986, "Zur Herausbildung und Entwicklung mongolischer Sprachen. Ein Überblick", *Die Mongolien: Beiträge zu ihrer Geschichte und Kultur*. Darmstadt, S. 29-69.

さらに、モンゴル語族に属する諸言語・諸方言の分類と分布については、栗林均 1989 「モンゴル系諸言語対照基本語彙——中国少数民族語言簡誌叢書の資料による——」『言語文化接触に関する研究』（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究報告）pp. 153-383. を参照されたい。

- (2) A. de Smedt, A. Mostaert, "Le Dialecte Monguor parlé par les Mongols du Kansu Occidental. I^{ère} Partie: Phonétique", *Anthropos* 24, 1929, pp. 145-165, 801-815; *Anthropos* 25, 1930, pp. 657-669, 961-973.

—1945 *Le Dialecte Monguor parlé par les Mongols du Kansou Occidental. II^e Partie : Grammaire, Pékin.*

—1933 *Le Dialecte Monguor parlé par les Mongols du Kansou Occidental. III^e Partie : Dictionnaire Monguor-Français, Pei-p'ing.*

- (3) 総論としては次の論著がある。

Čengeltei, “Dumdadu ulus-taki mongγol töröl-ün kele-nügüd ba mongγol kelen-ü ayalγu-nuγud-un yerünkei bayidal”, *Mongγol kele bičig*, 1957 No. 11, pp. 44-57; 1958 No.1, pp. 44-48; No. 3, pp. 32-39; No. 4, pp. 29-49; No. 6, pp. 35-39; No. 7, pp. 26-32; No. 12, pp. 19-57.

布・哈・托達叶娃 1959 「研究中国各蒙古語方言的初步總結」『中国語文』No. 9, pp. 32-40.

B. Ch. Todaeva, 1960 “Mongolische Dialecte in China”, *Acta Orientalia* X, pp. 141-169.

Б. Х. Тодаева 1960 《Монгольские языки и диалекты Китая》, Москва.

また、言語別の概説としては次の論著が公刊されている。

Nasunbayar 1961 “Düngsiyan kelen-ü temdeglel” 《Монголын судлалын зарим асуудал》 (*Studia Mongolica* Tomus III, Fasciculus 3, Улаанбаатар, pp. 53-106.

Б. Х. Тодаева 1961 《Дунсянский язык》, Москва.

B. H. Todaeva 1959 “Über die Sprache der Tung-hsiang”, *Acta Orientalia* IX, pp. 273-310.

B. Ch. Todaeva 1963 “Einige Besonderheiten der Paoan-Sprachen”, *Acta Orientalia* XVI, pp. 175-197.

Б. Х. Тодаева 1964,《Баоаньский язык》, Москва.

—1966, “Язык шира югуров” 《Язык желтых югуров》, Москва, pp. 45-81.

—1973 《Монгорский язык》, Москва.

照那斯圖 1964 「土族語概況」『中国語文』No. 6, pp. 477-496.

劉照雄 1965 「東鄉語概況」『中国語文』No. 2, pp. 153-167.

- (4) 照那斯圖 1981 『土族語簡誌』民族出版社, 北京。

劉照雄 1981 『東鄉語簡誌』民族出版社, 北京。

布和・劉照雄 1981 『保安語簡誌』民族出版社, 北京。

照那斯圖 1981 『東部裕固語簡誌』民族出版社, 北京。

なお、前掲の拙稿「モンゴル系諸言語対照基本語彙—中国少数民族語言簡誌叢書の資料による—」は、上記4書および、

道布 1983 『蒙古語簡誌』民族出版社, 北京

仲素純 1982 『達斡爾語簡誌』民族出版社, 北京

の2書の「語彙附録」の語彙を蒙古文語形の見出しのもとに、6言語の語彙対照表としてまとめたものである。

- (5) それらのうち、青海省、甘肅省の孤立的諸言語に関するものとしては、次のものが既に公刊されている。(左端の数字は「蒙古語族語言方言研究叢書」中のシ

リーズ番号)

- 007 布和編著 1986 『東郷語和蒙古語』呼和浩特。
- 008 布和等編 1983 『東郷語詞彙』呼和浩特。
- 009 布和等編 1987 『東郷語話語材料』呼和浩特。
- 010 陳乃雄編著 1987 『保安語和蒙古語』呼和浩特。
- 011 陳乃雄等編 1986 『保安語詞彙』呼和浩特。
- 012 陳乃雄等編 1987 『保安語話語材料』呼和浩特。
- 014 哈斯巴特爾等編 1986 『土族語詞彙』呼和浩特。
- 015 清格爾泰等編 1988 『土族語話語材料』呼和浩特。
- 017 保朝魯等編 1985 『東部裕固語詞彙』呼和浩特。
- 018 保朝魯, 賈拉森編 1988 『東部裕固語話語材料』呼和浩特。

なお, 次の索引は, 上記語彙集(『詞彙』)をもとに, そこからモンゴル語系の同系語彙を抽出して, 蒙古文語形の見出しのもとに配列したものである。

栗林均編 1986 『「東郷語詞彙」蒙古文語索引』東京。

栗林均編 1987 『「東部裕固語詞彙」蒙古文語索引』東京。

- (6) 各民族の人口は次の統計資料による。

『中国1982年人口普查資料』北京, 1985。

各民族の概観としては,

清格爾泰 1986 「關於蒙古語族語言及其研究」『内蒙古大学学报』(哲学社会科学版) No. 3, pp. 46-49。

『中国少数民族』北京, 1981。

があるほか, 次のような民族別の『自治県概況』, および『簡史』が便利である。

○土(モンゴル)族

『土族簡史』青海人民出版社, 西寧, 1982。

『互助土族自治県概況』青海人民出版社, 西寧, 1983。

『民和回族土族自治県概況』青海人民出版社, 西寧, 1986。

『大通回族土族自治県概況』青海人民出版社, 西寧, 1986。

○東郷(ドゥンジャン)族

『東郷族簡史』甘肅人民出版社, 蘭州, 1983。

『東郷族自治県概況』甘肅人民出版社, 蘭州, 1986。

○保安(バオアン)族

『保安族簡史』甘肅人民出版社, 蘭州, 1984。

『積石山保安族東郷族撒拉族自治県概況』甘肅人民出版社, 蘭州, 1987。

○裕固(ユグル)族

『裕固族簡史』甘肅人民出版社, 蘭州, 1983。

『肅南裕固族自治県概況』甘肅人民出版社, 蘭州, 1984。

- (7) G. de Roerich, 1958, *Le parler de l'Amdo*, Rome, 1958.

- (8) チベット語形は, 次の語彙集に掲載されている口語形による。

陳乃雄等編 1986 『保安語詞彙』呼和浩特。

- (9) 布和編著 1986 【東郷語和蒙古語】呼和浩特, pp. 65-67を参照。
- (10) 陳乃雄 1988 「蒙古語族語言的語彙」【内蒙古大学学报】(哲学社会科学版) No. 1, pp. 1-12.
- (11) Čenggeltei, 1981 “Mongyor kelen-deki qoyar tusalaqu tiile üge-yin tuqai”, 【内蒙古大学学报】(哲学社会科学版) No. 2, pp. 35-42.
- (12) 金鵬主 1983 【藏語簡誌】北京, pp. 35-37. なお, チベット語形の声調記号は省略した。
- (13) 林蓮雲 1985 【撒拉語簡誌】北京, pp. 62-69.
- (14) 李樹蘭, 仲謙 1986 【錫伯語簡誌】北京, pp. 76-82.

民族接触—北の視点から—

1989年7月7日 初版印刷

1989年7月15日 初版発行

編者 早稲田大学語学教育研究所
北方言語・文化研究会
(代表・田村すず子)

発行者 賀 來 壽 一

発行所 株式 六興出版
会社

郵便番号112

東京都文京区水道2丁目9-2

電話 東京(943)3431

振替口座 東京1-92448

©1989 北方言語・文化研究会 印刷・製本/中央精版印刷
落丁・乱丁の節はお取替いたします。無断転載、複写禁止

ISBN4-8453-3029-6 C3039